

羊水過少に対する人工羊水注入・羊水灌流について

○羊水過少とは

赤ちゃんは子宮の中で、産まれる直前まで「羊水」というお水の中で過ごします。羊水には様々な役割があり、外からの衝撃を和らげたり温度を一定に保ったりすることで赤ちゃんを守っています。また、赤ちゃんが羊水を飲み込むことで肺の機能を育んでいく役割もあります。

羊水が少なくなること「羊水過少」といいます。羊水過少の原因には大きくわけて2つの原因があり、1つは羊水をつつんでいる膜がやぶれ羊水が流れ出てしまったことによる「前期破水」であり、もう1つは赤ちゃんが羊水を作る量が少なくなることによります(赤ちゃんの元気がない、腎臓や膀胱に障害があるなどの原因があります)。

○人工羊水注入

羊水が少ないことで赤ちゃんへのよくない影響があると考えられる場合、当院では生理食塩水を用いた人工羊水の注入を行っています。お腹から超音波をみながら針を刺しゆっくりと人工羊水を注入していきます。注入する量や行う頻度は羊水の量をみながら症例ごとに調整しています。

○羊水灌流

しかし、前期破水によって膜がやぶれ羊水が流れ出ている場合には、人工羊水を注入してもすぐに流れ出てしまい子宮の中に羊水を保つことが難しい場合がほとんどです。そこで、当院では10年以上前から「羊水灌流」といって持続的に人工羊水を注入する治療を行ってきました。この場合はプラスチック製のカテーテルをお腹から子宮内へ留置し、持続的に人工羊水を注入します。24時間行いますので、この治療を行っている間は常時ベッド上で横になって過ごしていただく必要があるため、母体にとってある程度負担のかかる治療となります。

○期待される効果

羊水灌流は先進的な治療であり、一般的に広く認知された治療ではありませんが、特に妊娠26週未満での前期破水では羊水過少により肺の成長が妨げられる心配があり、人工羊水を注入する他には羊水過少に対する有効な治療がありません。

また早産期の前期破水では感染が原因であったり、破水後に感染が生じたりすることがありますが、羊水灌流によって子宮内を洗い流し感染をよくする効果も期待できると考えています。

残念ながらこの治療法を行っても、妊娠を何か月も延長することは難しいことが多いです。当院で羊水灌流を行った18例の検討では破水から分娩までの日数は1日～30日の範囲で平均は15日間でした。前期破水により羊水がほとんどない場合には破水から数日で分娩になってしまうことが多いことを考えると、我々は羊水灌流を行うことで赤ちゃんにとってよりよい子宮内環境が保たれ妊娠延長につながると考えています。

○羊水灌流の治療適応

原則として妊娠26週未満の羊水過少を伴う前期破水が対象となります。

ただし26週未満の前期破水であっても、胎盤の位置によってはカテーテルの留置が難しい場合や、子宮内に血腫がある・高度な子宮内感染が予測されるなど個々の状況により羊水灌流が適応にならない場合があります。また、カテーテルが抜けてしまったり折れ曲がったり詰まったりした場合には入れ替える必要があります。

○合併症

カテーテルを入れていることで起こる危険として、穿刺部位からの出血、感染、他臓器損傷、胎児徐脈などが考えられます。

